

野沢温泉村のスポーツ資源とトップアスリート

研究代表者 吉田 章

研究員 平田しのぶ

木路 修平

“地域に根ざしたスポーツ”が、今後の我が国におけるスポーツ振興の大きな課題となっていることについては異論のない所と言える。スポーツ基本法ならびにスポーツ立国戦略では、地域スポーツクラブを主体とした展開と、そこにトップアスリートが連携することによる好循環の創出を求めている。それらを現実のものとするためには、それぞれの地域が基本的に保有している資源・文化・人材を基盤として展開することが有効な方法であると考えられる。そこで冬季スポーツとしてのスキーにおいて、特筆すべき程の実績を有する野沢温泉村を事例として取り上げ、トップアスリートのセカンドキャリア開発支援の観点から、行政としての村の意見ならびに村出身のトップアスリートとしての意見を聴取した。

1. 観光資源としてのスポーツ

観光庁による観光立国政策の一つとして、スポーツイベントやスポーツプログラムを積極的に観光資源として役立てようとするニューツーリズム政策が推進されるようになった。これはツーリズムとしての従来の観光・マス・発地型から、体験・ミニ・着地型への変換を一つのモデルとしている。

スポーツをコンテンツとするツーリズムとしては、イベント参加型、観戦・応援型、スポーツ愛好型の三つに大きく類型化できる。そのコンテンツとしては、多種多様なスポーツ種目をあげることができるが、いずれにしても高い商品価値と魅力ある誘引力が重要な要因となる。そしてそれらの価値と魅力は短期的に創出することは難しく、地域特性と伝統によって培われたものこそが最も有力かつ定着的な効果を生み出す基盤となる。

しかしながら多様な変化を示す現代において、固定化した価値観では消費者によるニーズの変化に対応することはできず、コンテンツとしての伝統を守りつつも常に時代の変化に対応したプロモーションを推進する必要がある。なおかつ、ターゲットの種類によるニーズの変化にも的確に対応したプロモーションを必要とする時代となっている。

これまでもスポーツ・ツーリズムとしての観点からは、スポーツ合宿型が着目されてきていた。野沢温泉においても、クラブ合宿やスキー教室が盛んに展開されていた。他地域においては、菅平のラグビー合宿、北海道のマラソン合宿、福島県双葉町のサッカー合

宿等が地域活性化と結びついて成功してきた。しかしながら、これらの事例もそろそろ転換の時期を迎えている。

また最近ではインバウンド促進の観点から、外国人を特定ターゲットとしたツーリズム政策も行われるようになってきた。事例としては北海道ニセコにおけるオーストラリアを対象としたスキー、福島における韓国を対象とした温泉・スキー・ゴルフ、沖縄における韓国を対象とした野球キャンプ等では、戦略的なプロモーションが成功している事例として報告されている。

野沢温泉においても、近年におけるスキー入り込み客数の低下は顕著に現れている。このような現状を打開し、将来的に再び“スキー王国”としての野沢温泉の活性化を図る上において、その環境的資源はもとより、野沢温泉が生み、かつ育てて来たトップアスリートの人材資源としての価値を再認識し、村としての地域と一体化したスキー産業の再創出を図ることは、地域おこしの観点と共にトップアスリートのセカンドキャリアとしても極めて有効な方策になり得るものとしてとらえた。

2. 環境資源としてのスキー場

野沢温泉スキー場は、トップから最下部までの標高差が 1,085m に達する日本屈指のスキー場である。またスキー場、温泉街、村が一体となってスキーリゾートを作り上げてきたことでも知られている。豪雪地帯としての豊富な雪量とダイナミックなダウンヒルコースは、我が国を代表するスキー場であった。また技術的なレベルにおいても、我が国のトップに行くスキー場として有名であった。そのスキー場運営についての変遷は以下の通りである。

- 1923年 スキー場の創立。(大正 12 年)
- 1950年 初めてスキーリフトが設置される。(昭和 25 年)
- 1979年 日影ゴンドラリフト完成。(昭和 54 年)
- 1990年 長坂ゴンドラリフト完成。(平成 2 年)
- 2005年 村営から民営への移行(平成 17 年)

野沢温泉スキー場として数多くあるゲレンデの中でも、日影ゲレンデ(最大斜度 20 度)は本スキー場発祥の地で、我が国唯一の日本スキー博物館もここにある。1995 年のインタースキー(世界スキー指導者会議)では、メイン会場になった。1998 年の長野オリンピックでは、バイアスロン競技会場として村内において競技運営がなされた。

スキーコースとしての最長滑走距離は約 10km におよび、これは日本のスキー場の中でも最長距離である。コース構成上の欠点は、幅の広い中級者向けコースがないこととされている。かつては村営であったが、ウィンタースポーツ人口の減少による経営難や、行

政改革の流れから、2005年から村民出資の会社「株式会社野沢温泉」に経営が移管されている。

また、2010年12月1日より施行された「野沢温泉村スキー場安全条例」では、スキー場及びスキーヤーに対する責務を明示するとともに、野沢温泉村が指定したコース・ゲレンデ以外において捜索救助を受けた者に対して捜索経費を支払わせることが明記されており、我が国のスキー場経営をリードする一つのモデルとなっている。

3. コンテンツとしてのスキーと温泉・文化資源

野沢温泉は、豊富で高温な天然湧出による源泉かけながしと、外湯と呼ばれる共同浴場など伝統と情緒豊かな温泉街として全国的にも代表的な温泉である。冬季におけるスキーとの組み合わせによって、一時は活況を呈した。また、他地域によく見られる観光主体の温泉場とは趣を異にし、いわゆる娯楽場的施設はほとんどなく、素朴で健全なイメージを主体とした理解がなされている。

また文化的資源として価値の高い食材や民芸品も豊富にそろっており、アピールの方法と組み合わせによって更に有効な観光資源となりうるものである。商品価値を高めるためのディスプレイとプロモーション、そして活用ノウハウの提示が資源掘り起こしのテクニックとして重要な働きをする。

我が国においても温泉のそもそものは「湯治」として位置付き、現在でも入湯による効用は広く支持されている。諸外国では、ドイツの温泉療法施設（バーデンバーデン／クアハウス）、フランスの海洋療法（タラソテラピー）など、温泉を積極的に健康増進や身体治療に活用している事例は多く、2014年冬季オリンピック開催地のソチは、温泉を中心としたロシア随一の保養地として有名な場所でもある。

従来から着目されていたスキーと温泉の組み合わせを現代的に新たな観点から再構築し、オールシーズン対応としての機能を併せ持った形での、スキーを代表とする運動（及びその他スポーツ）と積極的な疲労回復、そして心身にわたる健康増進のための効果的なプログラムコンテンツを整備し、スポーツツーリズム・ヘルスツーリズム・医療ツーリズムにまたがる範囲での季節縦断的なコンテンツをパッケージ化することも検討に値する。そしてそれらは、競技志向・技術志向のハイレベルなスキーヤー（スポーツマン）から、健康志向・体験志向の一般スポーツ愛好者まで取り込むような面（二次元）としての広がり、そして質（グレード）としての縦軸によって三次元的展開を形成することができ、ニーズの多様化に的確な対応を可能とすることができるものである。

加えて青少年を含む家族層の取り込みに対しては学習機能を前面にアピールすることが効果的であり、既にある文化資産を活用した指導・教育システムの体系化と指導員の配置

を整備することが必要な観点となる。

4. ホスピタリティーとしての人的資源

杉山 進氏（昭和7年/1932年/4月10日/野沢温泉村生まれ）をはじめとし、これまでの冬季オリンピック大会（表1）に野沢温泉村から15名の代表選手（表2）を輩出した実績は特筆に値するものである。この背景は、まさしく村営産業としてのスキーの位置づけにあったものととらえられる。地域としての学校教育から青少年育成、そして地域をあげての支援とその後における実績の活用が、時代背景とともに好循環をなしていた具体的事例であった。我が国を代表するスキー場は他にも数多くあるが、これだけのトップアスリートとしての人的資源と内容的実績を有したスキー場は例を見ない。この観点こそが他のスキー場との差別化を促し、観光資源としての価値を高めるものと認識できる。

数的比較の上においては、かつてのスキーブームと言われた時代に比べて全体的に大きな落ち込みを示しているが、スキー自体が有する質的価値やますます広がってきた多様性の面においては決して悲観的材料があるわけではなく、スキーという活動自体が本来有している価値を見直し、新たなツーリズムとしての観点から組み直すこと（リノベーション）によって再びレベルの高いスキーのメッカとして活性化を図ることは、野沢温泉村にとって将来的に有効な発展策であると考えられる。ただしそこでは従来からのスキーの範疇でとらえることなく、新たな枠組みへの広がり可能性への発展を視野に入れた上での冬季スポーツとしての理解を必要とすることである。

そしてスキーをベースとした冬季スポーツを核としながらも、夏季におけるトレーニングへのつながり、そしてそこからの多様な関連スポーツへの展開と発展（高原スポーツ・森林スポーツ・温泉スポーツ）につながるルートマップのデザイン化を必要とするものであろう。

着地型ツーリズムの一番の資源は人材資源であるとも言われている。またリピーター要因の主なものは「人」であるとも言われている。環境を主軸とするエコツーリズムも最も重要なファクターは環境資源ではなく、受け入れる立場のインタープリテーション能力とホスピタリティーである。野沢温泉村（地域）のすべての人々に、それぞれの世代と立場を生かしたホスピタリティーを育成することこそが観光立村の原点であるとも言えよう。そしてそのリーダーとしての役割を地域出身のトップアスリートが担うことができれば、その知名度や信頼の点から情報効果は大きく、トップアスリートによる直接的な指導は、地域スポーツとしての観点のみならず観光産業としての観点からも成果を上げ得るものとなることであろう。

表1 オリンピック冬季競技大会一覧

第 1 回	1924 年	シャモニー (フランス)	
第 2 回	1928 年	サンモリッツ (スイス)	日本初参加
第 3 回	1932 年	レークプラシッド (アメリカ合衆国)	
第 4 回	1936 年	ガルミッシュパルテンキルヒェン (ドイツ)	
第 5 回	1948 年	サンモリッツ (スイス)	
第 6 回	1952 年	オスロ (ノルウェー)	
第 7 回	1956 年	コルチナダンペッツォ (イタリア)	猪谷千春銀メダル
第 8 回	1960 年	スコーバレー (アメリカ合衆国)	
第 9 回	1964 年	インスブルック (オーストリア)	
第 10 回	1968 年	グルノーブル (フランス)	
第 11 回	1972 年	札幌 (日本)	日の丸飛行隊
第 12 回	1976 年	インスブルック (オーストリア)	
			長野 (やまびこ) 国体 (1978 年)
第 13 回	1980 年	レークプラシッド (アメリカ合衆国)	
第 14 回	1984 年	サラエボ (ユーゴスラビア)	
			私をスキーにつれてって (1987 年)
第 15 回	1988 年	カルガリー (カナダ)	
第 16 回	1992 年	アルベールビル (フランス)	
			スキー最盛期スキー人口 1860 万人 (1993 年)
第 17 回	1994 年	リレハンメル (ノルウェー)	
			第 15 回インターシー開催 (1995 年)
			長野新幹線開業 (1997 年)
第 18 回	1998 年	長野 (日本)	7 競技 68 種目メダル獲得計 10 個
			上信越自動車道全線開通 (1999 年)
第 19 回	2002 年	ソルトレイク (アメリカ合衆国)	
第 20 回	2006 年	トリノ (イタリア)	
第 21 回	2010 年	バンクーバー (カナダ)	
			雪マジ 19 (2011 年)
第 22 回	2014 年	ソチ (ロシア)	
第 23 回	2018 年	平昌 (韓国)	

表2 野沢温泉村出身 オリンピック出場者一覧

(野沢温泉村 HP より)

1	杉山 進	スキー アルペン競技 1956年(昭和31年)第7回冬季オリンピックコルチナ・ダンペッツォ大会(イタリア)
2	富井 一	スキー アルペン競技 1964年(昭和39年)第9回冬季オリンピックインスブルック大会(オーストリア)
3	佐藤 和男	スキー クロスカントリー競技 1960年(昭和35年)第8回冬季オリンピックスコーパーレー大会(アメリカ) 1964年(昭和39年)第9回冬季オリンピックインスブルック大会(オーストリア) 1968年(昭和43年)第10回冬季オリンピックグルノーブル大会(フランス)
4	松村 元治	スキー クロスカントリー競技 1972年(昭和47年)第11回冬季オリンピック札幌大会(日本)
5	片桐 美雪 (現:古川)	スキー アルペン競技 1972年(昭和47年)第11回冬季オリンピック札幌大会(日本)
6	古川 年正	スキー アルペン競技(北海道出身 現在野沢温泉在住) 1972年(昭和47年)第11回冬季オリンピック札幌大会(日本)
7	富井 澄博	スキー アルペン競技 1972年(昭和47年)第11回冬季オリンピック札幌大会(日本) 1976年(昭和51年)第12回冬季オリンピックインスブルック大会(オーストリア)
8	片桐 幹雄	スキー アルペン競技 1976年(昭和51年)第12回冬季オリンピックインスブルック大会(オーストリア) 1980年(昭和55年)第13回冬季オリンピックピクレークプラシッド大会(アメリカ)
9	富井 剛志	スキー アルペン競技 1992年(平成4年)第16回冬季オリンピックアルペールビル大会(フランス) 1998年(平成10年)第18回冬季オリンピック長野大会(日本)
10	河野 孝典	スキー コンバインド競技 1992年(平成4年)第16回冬季オリンピックアルペールビル大会(フランス) 団体金 1994年(平成6年)第17回冬季オリンピックリレハンメル大会(ノルウェー) 個人銀・団体金
11	西方 仁也	スキー ジャンプ競技 1994年(平成6年)第17回冬季オリンピックリレハンメル大会(ノルウェー) 団体銀
12	森 敏	スキー コンバインド競技

		1998年(平成10年)第18回冬季オリンピック長野大会(日本)団体5位 2002年(平成14年)第19回冬季オリンピックソルトレークシティ大会(アメリカ)団体8位
13	富井 彦	スキー コンバインド競技 1998年(平成10年)第18回冬季オリンピック長野大会(日本)団体5位 2002年(平成14年)第19回冬季オリンピックソルトレークシティ大会(アメリカ)団体8位
14	畔上 大地	スキー クロスカントリー競技 2002年(平成14年)第19回冬季オリンピックソルトレークシティ大会(アメリカ)
15	上野 修	スキー フリースタイル(モーグル)競技 2006年(平成18年)第20回冬季オリンピックトリノ大会(イタリア)

5. 人材の育成と活用

前述のように、一番の資源は我が国を代表する程の規模と内容を兼ね備えたスキー場としての環境資源であり、同時にオリンピック代表15人という形での人材資源とすることができる。これらが野沢温泉村(豊郷村)という自治体のもと、古くよりスキー選手としての人材の発掘・育成・強化・支援・活用(セカンドキャリア)といったシステムを機能させ、スキー王国とまでの評判を作り上げるとともに、我が国におけるスキーブーム原動力の一つとなっていたといっても過言ではない。すなわち旧社会主義国によるステートアマと呼ばれる選手育成のミニモデルが、期せずして自然な形で実践されていたものと見ることができる。

その後、時代背景の多様かつ急速な変化によってこのシステムが自然崩壊したものと考えられる。しかしながら資源としての価値は今日的な背景を鑑みた時にむしろ高揚していると言っても良く、新たな視点とシステムの構築により野沢温泉村(小さな政府)としての好循環を再構築することが望まれる。そして再度スキー産業を基軸として自信を持ってリニューアルした姿を提示することが、着地型ツーリズムとしての資源価値を創出して誘引力を高めるとともに、村民の意識をも高めて村の活性化につながるものと考えられる。

改めてスキー(スノースポーツ)に特化した人材の発掘・育成・強化・支援・活用までのシステムを、村規模における産・官・学の連携によって実践できることを目的とし、スキー(スノースポーツ)に人生の目標を置く人材が全国から集まる地域となることを目標とするものである。

ことの善悪は別にすると、甲子園を頂点とする高校野球球児の野球留学は今や常態化している。また広島県立加計高芸北分校では、来年度(25年度)からスキー部入部のた

めの入学希望者を隣県である島根県全域から認めることにした。このように従来の概念に規定されず、価値あるもの求めるものを目指して学びたい（学ばせたい）という行動はどんどん積極化している。

小・中学校からの一貫教育を可能とする現在の教育システムの中で、スキー（スノースポーツ）を目指す青少年の可能性を育み、目標達成後の幅広い活躍（セカンドキャリア）までを視野に入れた「スノースポーツ・ツーリズム専門学校」の村内設立はその具体的な検討例の一つに値するものとして提案したい。そして地域全体を巻き込んだ一つの小さな政府方式による、新たな地域好循環を形成するきっかけとなることを期待している。スキー博物館は十分にその学舎の一部となることだろう。そして地元の生んだトップアスリートを中心とした好循環が創出されることであろう。既にサンクト・アントン（オーストリア・チロル州）との姉妹都市提携を行っているところから、オーストリア国立スキー学校との連携もスムーズに進むことが期待される。

6. インタビュー結果

以上の内容を事前に資料提示すると共に質問事項を予め伝えた上でインタビューを申し込み、行政責任者としての村長と、村出身としてのトップアスリートの2名に面談することができた。以下に、その内容を示す。

1) 野沢温泉村 村長 富井俊雄氏へのインタビュー

日時：2012年9月6日 10:30～12:00

場所：長野県 野沢温泉村役場内 村長室

富井俊雄村長は、観光課課長、長野国体参与を経て、2009年（H.21）より現職となる。また地縁団体法人・野沢組副惣代を兼任している。

<質問事項>

- ◆野沢温泉村が15名のオリンピックを輩出していることについての意識、とらえ方は？
- ◆トップアスリートとしての育成期、活躍期に対する村のスタンスは？
- ◆トップアスリートとしての引退後に対する村のスタンス、選手に望むことは？
- ◆引退後の選手のあり方については？
- ◆今後の人材育成に関することは？ その他

村の現状と課題について

以前に比べて村のスキー人口は減少している。例えばジュニアスキーヤー（トレーニングを受けている）は、長野五輪以来現在に至るまで概ね、小学生各学年20名×6学年=120名のうちの約80名である。ところが中学生になると約10名、高校生では数名というよう

に年齢とともに減少していつている。

原因についてはいろいろと考えられるが、① コーチの指導者意識不足、② 子供たちの興味関心の多様化、③ スキーに携わる職業を具体的にイメージできない、ということがあげられる。

① については、野沢温泉村では指導者（アルバイト勤務）サポートを手厚く行っており、村からの補助金、スキークラブ運営費からの支給、受講料収入をそれに充当している。一般的に生活ができる基準で支給しているが、それに甘んじてしまい、成長意欲ならびに指導意欲の低い指導者が出てきている。そもそも引退後の成長を目指す選手が少なくなってきたのではないか。打開策として野沢温泉スキークラブで雇用し、職務としてスキーヤーの育成にあたらせることも検討したいが、雇用人数や能力面での不安がある。村としての選手育成、コーチ育成についてシステム再考の時期を迎えている。今後は、株式会社野沢温泉職員としての立場でクラブ方式、会社方式を活用しながら進めていきたい。

そもそも、村の職員についても高卒の採用は避けたいのが村長の方針である。村という狭い世界観でしか物事を捉えられない職員は不要という考えが基本である。職員にも自分で考えて仕事をしてほしいと思っているので、受動的な人材は雇う価値がないと考えている。

② については、ジュニア期の子供たちの興味関心が、スキーしかなかった時代から変化している。他にもスポーツはいろいろとある。親の世代の価値観の変化もまた同じである。スキーをすることよりも、他の地域に越境して勉強をするということに時間を費やす家庭が増えている。進学というタイミングの際にスキーとの関わりを再考することで、スキー離れをしているようだ。子どもの意思よりも、親の意思が優先されることも多い。「もうスキーはいいでしょ？」という親の言葉で環境が変えられてしまう。

また、“スキーをさせるとお金がかかる”という固定観念があり、親がそういうメッセージを日常生活で発信していることによって、子供にも無意識のうちに罪悪感が植えつけられている実態もある。スキーを職業としても食べていけない、生活して行けない、という共通認識が根付いているようである。村としてもサポートをしているが、残念ながら有効な解決には至っていない。

③ については、近年ロールモデルとなる者がいないのも一因である。例えば、元オリンピックの河野孝典氏を例にとると、引退後に野沢温泉村役場職員として雇用したが、大学院への進学、海外でのコーチ留学などを経て、現在では JOC 関連団体で雇用され、国レベルでの活躍をしている。これは、本人の希望でもある。この場合野沢温泉村が進学費用などをバックア

ップしており村への貢献度を問われることもあるが、個人的にはトップアスリート故にこのような進路決定も認めたいし、彼のように自分で考え自分で行動してもらえるとすることは最も正しいと考えている。彼は村の宝でもあると考えている。

また元オリンピックの片桐幹雄氏には、今般、野沢温泉村に戻っていただき、スキー関連事業の推進や人材育成などを全般的にマネジメントしてもらおうことになっている。そこでは選手の育成から諸般の事情を鑑みての全体的な立て直しをしてもらえると期待している。片桐氏においても、自分の進路を自分で決めてきたアスリートなので期待している。

その他、ロールモデルの問題に関しては、実はトップアスリートについてはあまり気にしていない。これまでのオリンピック代表 15 名の進路を見ても社会貢献やスキー界の発展のために活躍している。元オリンピックともなると、それぞれに自律した人生を歩んでいる。

一番の課題はその下の層、すなわちオリンピック出場に手が届きそうで実現しなかった人たちである。オリンピックに出場できるほどの人材は自己管理ができており、だからこそオリンピックであるが、その下の層は自己管理や自己統制などができないからそこまでいかないと考えられる。従って、そうした人材を村で雇用するというのはいろいろと課題がある。あくまでも気力と能力を有した選手を必要としている。解決したいのはまさにオリンピックになれなかった多くのこのような人材である。しかしながら、実態は①のとおりである。

2) トップアスリート 片桐幹雄氏へのインタビュー

日時：2012年9月6日 13:00~14:30

場所：長野県 野沢温泉村 片桐旅館ロビー

片桐幹郎氏は野沢温泉村の出身であり、第12回冬季オリンピックインスブルック大会、第13回冬季オリンピックレークプラシッド大会のスキー競技アルペン種目代表選手となった。全日本スキー連盟理事を務めると共に、野沢温泉スキークラブ会長として後進の育成に努めている。

1) トップアスリートとしての現役中に、引退後のことについて考えたか、または考えない様にしていただけか。

⇒もともとコーチングに興味があり、また現役中から、世界と戦うための勉強をしていたこともあり、引退後のコーチという進路は考えていた。したがって、引退時には迷いはなかった。

2) 引退の目安や時期については、自分で意識していたか。

⇒競技最終年を、自身のパフォーマンスシステムの集大成の年としていたので、競技成績が良くても、悪くても引退を決めていた。結果的に過去最高の成績であった。迷うことなく引退した。

3) 引退後の人生について、具体的な見通しや計画はあったか。

⇒オーストリアへのコーチ留学（国家認定トレーナー資格取得）後、ナショナルチームコーチという路線はひかれていた。

4) 現職着任のきっかけと背景について。

⇒競技引退を機に所属企業（北野建設）を退社し、コーチ職と並行して（生活の後ろ盾として）家業の会社経営を引き継いだ。後半になって、コーチ業（掛け持ち）が成り立つようになった。

5) 現役活動中にやっておけば良かったと感ずることは。

⇒現時点で後悔はないが、スキーを通して経験したことをもっと深く理解するために、基本的知識や教養をもう少し勉強をする機会があれば良かったと思う。スキーを通して経験できたことは、普通の勉強だけでは決して経験できないものなので。スキーのため、コーチの勉強のためといった目的のはっきりした勉強は集中できるものである。留学もしたし、多くの出会いにも恵まれたのでほぼ満足しており、後悔はない。

6) 現役活動をとおしてこそ獲得できたと思っていることは。

⇒16歳からの留学と言った海外での一人の生活によって、決断力、判断力を養えた。何事も自分自身で判断、決断しなければならなかった。

併せて、どこにいても知り合いがいるというような国際的な人脈形成は引退後の現在において大いに役立っている。

7) これからの指導者や組織に対して望みたいことは。

⇒指導者は選手の全てを見なくてはならない。そのために専門性の掘り下げと経験を併せ持った、コーチとしての人間的幅の広さ。例えば「この選手は指導できる、この選手はできない」ではなくどのようなタイプの選手にも対応できるような人間性が必要。

8) これからのアスリートにアドバイスしたいことは。

⇒夢を持ち続け、そして膨らませるとエネルギーが生まれる。そして、それを維持するこ

とが大切である。その夢に基づく目標を設定し、実現すること。

夢は持つもので、目標は乗り越えるものである。

9) トップアスリートとしての理想の人生があるとすれば、そしてその障害となっているものがあるとすれば。

⇒自分のやってきたもの、思いを寄せてきたもの（スポーツ）で突き進んで生活したい。

しかし、現状では生活できない。社会環境が整っておらず、家族の協力が必須である。

また、社会環境においては、地域特性を生かすべきである。自分自身は忘れていたと思う。これからも「スキー好き」を育てていきたい。

7. まとめ

背景としての豊かな資源と共に、多くの可能性を有していると考えられる野沢温泉村を事例とし、スキー（スノースポーツ）を軸とした自治体規模におけるアスリートの活用と将来的発展を視野に入れた専門学校設立を核とするシステムの提案であったが、一つは少子化が見込まれている時代背景の観点、合わせて村という自治体規模として取り組める事業の限度等、積極的な回答を得ることはできなかった。しかしながらトップアスリートに対するロールモデルとしての期待は高く、村への貢献に関する期待にも大きなものがあつた。その期待を具現化するための場作りを、地域における好循環の創出のために社会システムの中に位置付ける形で実現することが最も望まれる所である。

またトップアスリートとしての片桐幹雄氏の場合には、自身において明確な目標意識を持ち、計画的なアスリートキャリアを築き上げてきたものといえる。村からの支援もあり、比較的恵まれたアスリートキャリアであったと思われる。しかしながら引退後には生活の後ろ盾を考えねばならない状況もあり、掛け持ちながらコーチ業が成り立ったのも後半においてということでスムーズなセカンドキャリアの展開ではなかったととらえられる。またアスリートキャリアに満足しており後悔はないとしながらも、もっと深く理解するために基本的知識や教養をもう少し勉強をする機会があれば良かったと述べている様に、現役活動中における適切な指導や教育の必要性を裏付ける言葉であった。トップアスリートをロールモデルとするセカンドキャリアのモデル構築が、問題であると指摘されたセカンドトップの改善にも資することであろう。